

「時を見分ける」

2015年09月10日

ルカによる福音書 12章 54節～56節。イエスはまた群衆にも言われた。「あなたがたは、雲が西に出るのを見るとすぐに、『にわか雨になる』と言う。実際そのとおりになる。また、南風が吹いているのを見ると、『暑くなる』と言う。事実そうなる。偽善者よ、このように空や地の模様を見分けることは知っているのに、どうして今の時を見分けることを知らないのか。」

主イエスは群衆に語られた。「あなたがたは、雲が西に出るのを見るとすぐに、『にわか雨になる』と言う。実際そのとおりになる。また、南風が吹いているのを見ると、『暑くなる』と言う。事実そうなる。」西の地中海の上空に積雲が湧くと雨になる。南風が吹くと、荒れ野からの熱風で暑くなる。事実、そうであった。彼らは、これらの気候変化をよく知っていた。主イエスは「偽善者よ、このように空や地の模様を見分けることは知っているのに、どうして今の時を見分けることを知らないのか」と言われた。「偽善者よ」と、ファリサイ派の人々や律法学者に向かって、自然的な気候変化を見分けることができるのに、霊的な「今の時」を見分けることができないと語っている。

「今の時」とは、主イエスの言葉と業によって「神の国」が到来している現在である。律法厳守に凝り固まって、人々の上に君臨し、大柄に振る舞っている彼らは、主イエスがもたらした「目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている（ルカ福音書 7章 22節 c）」神の国の現実を見ることができない。主イエスに敵愾心を燃やす彼らは神の恵みの現実を見分けようとしなかった。彼らの心頑なな不信を指摘、非難されたのである。

私たちは主イエスが現した「神の国」を見ているか。見ていないし、見ることはできない。見ているのは破れ切った惨状でしかないと言わざるを得ない。事柄の真偽が分からない。自分の足で歩くことはできず、深い虚無の中で死人のようにうずくまっている。強い者は弱い者を支配し、公平と正義からはほど遠い現実しか見えない。

しかし、信仰において受け入れていることがある。主イエスの十字架と復活によって、罪が贖われ赦され、神に「よし」と是認されている福音である。生きている現実がどうあろうとも、罪なき者とされて永遠の神と結び合い、インマヌエルの恵みによって「神の国」の住人にされている。「今の生」が永遠と結び合っているから、歴史の終りに完全な形で「救い」が与えられることが保証されている。現在は手形で与えられているが、終末には完全に与えられることを望むことができる。この望みは、見えないけれども「神の国」を慕い求める救いとなる。パウロはローマ書 8章 21節～25節で「つまり、被造物も、いつか滅びへの隷属から解放されて、神の子供たちの栄光に輝く自由にあずかれるからです。被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。被造物だけでなく、“霊”の初穂をいただいているわたしたちも、神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。わたしたちは、このような希望によって救われているのです」と書いている。

霊の初穂（手形）をいただいている者は「永遠の今」を生かされている。だから、うめき苦しもうとも、終末時の完成を待ち望み、救いの時を見分けているのである。